

語学資料としての小冊子『支那話要略全』について(上)

野原将揮

1.はじめに

本稿では『支那話要略全』についてその内容を記す。本書は縦 12 cm、横 8cm、厚さ 5mm 程度の小冊子で、表紙は黄色で、線装本である。その内容から簡易会話書のような性格を持つ書であると考えられる。最大の特徴は凡例に声調に関する記述があること、本文には声調の圈点があり、本文横に仮名で音を表わしており、「想」を「ヒァン」と表記していることなど幾つか興味深い事例が見受けられることである。本書「緒言」に東京鎮台編とあることから、その使用目的はあまり良いものではなかったと思われる。しかし、その当時の使用目的が如何であれ、語学資料としての価値は大いにあるのではないだろうか。以下、緒言・凡例・本文と挙げていく。

2.「緒言」「凡例」

「緒言」には次のように記してある：

「本書八有事ノ日ニ當リ將校下士卒ヲシテ日用ノ不便ヲ免レシメンカ爲メ極メテ卑近ナル支那話ノ大要ヲ畧記セシモノナリ。今之ヲ一冊子トナシ他日ノ用ニ供スト云爾。明治二十年一月二十四日 東京鎮台」(句点は筆者によるものである)

以上のように記してあり、当時の方がこの小冊子を会話書として携帯していたことが窺える。

「凡例」：

- 「一、 小圈点ノ左ノ下ニアルヲ上平ト爲シ、左ノ上ニアルヲ下平ト爲シ、右ノ上ニアルハ上聲ニシテ、右ノ下ニアルハ去聲ナリ。
- 二、 上平八聲ノ平ニシテ安キモノナリ。下平八聲ノ平ラカニシテ輕キモノ

ナリ。聲ノ上ヲ猛烈ナルモノハ上聲。其ノ去テ哀遠ナルモノハ去聲ナリ。」

以上をまとめると次のようになる：

圏点が左下・・・・上平

圏点が左上・・・・下平

圏点が右上・・・・上聲

圏点が右下・・・・去聲

これは特に目新しいものではない。興味深いのはその調類・調値についての解釈法である。

上平・・・・平ラニシテ安キモノ

下平・・・・平ラカニシテ輕キモノ

上声・・・・聲ノ上ヲ猛烈ナルモノ

去声・・・・其ノ去テ哀遠ナルモノ

去声は比較的理解し易いが、上平・下平・上声についてはこの説明を通じて会得できるものとは到底思えない。

3. 「本文」一部例

「本文」の一部内容を記す（詳細は次号記載予定）。本文は全 20 章である。圏点については表記に於ける便宜上、数字で表わすこととする。

- 1 左下（上平）
- 2 左上（下平）
- 3 右上（上声）
- 4 右下（去声）
- x 表記無し

・第一

「^イ一（1）^{アル}二（4）^{サン}三（1）^ス四（4）^ウ五（3）^{リウ}六（4）^チ七（1）^ハ八（1）^{チユウ}九
（1）^シ十（2）^{シイ}十一（21）^{シアル}十二（24）^{シサン}十三（21）^{シス}十四（24）^{シウ}十五（23）

^シリウ 十六 (24) ^シチ 十七 (21) ^シハ 十八 (21) ^シチユウ 十九 (23) ^{アル}シ 二十 (42) ^{アル}シイ 二十一 (421)
^{アル}シアル 二十二 (424) ^{アル}シサン 二十三 (421) ^{アル}シス 二十四 (424) ^{アル}シウ 二十五 (423) ^{アル}シリウ 二十六 (424)
^{アル}シチ 二十七 (421) ^{アル}シハ 二十八 (421) ^{アル}シチユウ 二十九 (423) ^{サン}シ 三十 (12) ^ウシ 三十一 (32) ^{リウ}
^シ 三十二 (42) ^チシ 三十三 (12) ^ハシ 三十四 (12) ^チユウシ 三十五 (32) ^イバイ 三十六 (13) ^{アル}バイ 三十七 (43) ^{サン}
^{バイ} 三十八 (13) ^イチエン 三十九 (11) ^{アル}チエン 四十 (41) ^イワン 四十一 (14) ^イチエンワン 四十二 (114) ^イバイワン
(134) ^{リン} 四十三 (2) ^イバイワン 四十四 (134) ^{リン} 四十五 (2) ^{サン}バイコ 四十六 (13×)」

・ 第二

^リヤンシヨイ 涼 水 (23) ^カイシヨイ 開 水 (13) ^チヤイホー 柴 火 (23) ^ムタン マキ、木 炭 (44) ^スミ、
^メイトン 煤 炭 (24) ^セキタン、^チャウエン 潮 煙 (21) ^タバコ、^バイミー 白 米 (23) ^コメ、^チャアエイ 茶 葉 (24)
^チャ、^テーンシン 點 心 (31) ^クワシ、^エイ 魚 (2) ^サカナ、・・・

4 . 結語

以上「緒言」「凡例」「本文の一部」を記載した。一部本文から、上声の多くを長母音で表わす傾向が見られること、「魚」(中古音韻地位は疑母遇攝魚三開上)や「葉」(以母咸攝葉四合入)には「エイ」で表わしており編者の苦勞が窺える。この小冊子の目的はあまり良いものとは思えないが、語学資料としての価値はあるだろう。本文については次号記載する。